

CLOSE-UP Interview

内田 淳正 医学系研究科教授

地方に住む人々への
想いを胸に、
挑戦の道を歩み続ける。

整形外科医がまだ少なかった時代、敢えてその分野に飛び込んだり、いち早くがんの骨転移治療に取り組んだり…。大学法人化後の附属病院経営を託されるなど、三重大学医学系研究科の内田教授は、常に挑戦の道を歩んできた。そして4月からは学長として、いよいよ大学運営に乗り出す。医療人として大切にしてきた地方の人々への想いを胸に、社会を支える「人財」の育成へ。その挑戦はまだ続く。



人工骨。骨の欠損部に充填する。体と同様の成分で拒絶反応はない。



脊椎骨折のレントゲン写真。病院長自ら、病院で診療にあたる。

人生を変えた人工骨の研究

「本当は田舎へ帰って開業する予定だったんですが」と語るのは、医学系研究科の内田淳正教授。三重大学医学部附属病院院長でもある。徳島県の山間の町で育ち、開業医として地域の人々の健康を支える父の姿を見て、医学の道へ進んだ。教授が大学を卒業した当時は、人工関節手術の勃興期。外科分野の新しい息吹に興味を抱いた教授は、整形外科医として臨床で治療にあたり、やがて人工骨の研究を開始。オーストラリアにも留学する。「向こうではいろんなことを考える時間があり、独創的な研究が進められた」と教授。帰国後、骨の欠損部分に充填する人工骨を開発し、国内では初めて整形外科で臨床に応用するなど、オーストラリアでの研究は大きく花開く。それは、臨床と研究の両面で活躍する教授のその後を決定づけるものとなった。

がんの骨転移の治療に取り組んで
現在、教授が取り組む研究テーマの一

つが、がんの骨転移である。がん治療が進歩し治療成績が向上する一方で、骨にがんが転移する患者が急増。日本でがん患者が毎年約50万人発生する中で、骨転移の患者数は推定10万人以上、20万人近いとも言われ、整形外科での治療ニーズが高まっている。骨軟部腫瘍の治療にあたってきた教授は、いち早く骨転移の治療に着手。転移のメカニズムを解明する基礎研究と同時に、臨床では磁性体温熱療法、光線力学療法などに取り組んでいる。「苦痛の少ない治療で患者さんのQOL(※1)を高めたい」と開発した治療法は評判を呼び、現在は、全国から患者たちが病院を訪れている。

患者さんの思いに応えるために
こうした治療姿勢の原点にあるのが、教授がプロ野球のキャンプドクターをしていた頃の経験だ。あるとき、教授はベテラン選手のケガを全治1週間と診断。しかし、選手は1ヵ月後に復帰し、マスコミに叩かれたと

いう。「当時、私は選手が何を望んでいるのか、理解していなかった」と教授。「整形外科医としての診断は妥当だったが、プロ野球選手としては、あと数年、活躍するために十分に体を休ませたかったわけです」この経験は、教授の臨床における一つの指針となった。「患者さんは一人ひとりいろんな思いを抱えている。その思いを十分に理解していないと臨床医学は成り立たない。自分の思いで治療するのではなく、患者さんのニーズにどう応えるかというのが、私の治療の基本です」

地道な調査で得た大きな成果

華やかな実績の一方で、教授が三重大学に着任以来、10年以上続けているのが、旧・宮川村での変形性膝関節症の疫学調査だ。当時、高齢社会を迎えた日本だったが、変形性膝関節症の発症頻度がわかるデータがなかった。しかし、国が医学研究の方針を考えるうえで、患者の実態を把握するデータは不可欠。だからこそ、

労力ばかりがかかる大変な仕事だが、教授はその調査に乗り出す。この地道な調査は、やがて大きな成果を生む。教授らの調査データをもとに理化学研究所と共同研究を進めた結果、変形性膝関節症の原因遺伝子を突き止め、世界で初めて増悪に関与する遺伝子も明らかにしたのだ。画期的な発見だが、「この調査で田舎の人に検診の機会を提供することができた。自分の地元には帰れなかったが、私も少しは地方の人々の役に立てたかな」と教授。地方に住む人々への想いは、今も変わらずに心に宿る。

対話を重視した大学運営を

臨床と研究と教育。加えて教授は、病院長として病院経営にも手腕を振るってきた。高度先進医療を推進しながら、いかに経営効率化を図るか。課せられた命題のハードルは高いが、「最近では病院の皆さんが経営感覚を持って、やってくれるようになった」と手応えを語る。

先日、学長候補になり、最近では東奔西走。病院長の職務を後任に引き継ぎながら、大学運営のビジョン実現に向けて施策を練る日々を過ごす。大学の使命は、社会の宝となる「人財」を育てること。そのために、「対話」による温かさのある大学運営を目指すという。経営の安定化や研究環境の支援、産学官連携、女性が働きやすい職場作り、教育の国際化と、大学を取り囲む課題は山積みだ。しかし「大変と言ってもじゃあない。みんなで明るい未来に向けて課題に取り組んでいこう」と笑う。バイタリティーあふれるその姿からは、教授が描く「対話と温かさの大学」の未来像が見えてくる。

(※1) QOL
Quality of Lifeの略。「生活の質」。

内田 淳正 うちだ あつまさ
医学系研究科教授
博士(医学)
三重大学医学部附属病院院長
専門分野は、整形外科



顕微鏡でがん細胞を確認
実験用にごん細胞を培養。細胞の様子を観察する。



オリックスのサインボール
キャンプドクター時代にイチローをはじめ選手からもらった。



趣味はゴルフ
ハンディ12、平均スコアは80台半ばと、かなりの腕前。



オーストラリア留学時代
西オーストラリア大学での研究生生活が人生を変えた。